

[ちくほう地域研究]

白蓮 八一年の心の旅路

筑豊地域研究会会員
宮嶋 玲子

旅先にも数本の筆を持ち歩き、揮毫した

- 一 はじめに―尊厳を求めて
- 二 幼少期―ミミズの餌で魚を
- 三 女学校時代―キリストのむすめ
- 四 筑豊時代―読経の日々
- 五 宮崎燐子―わが子は若くして…
- 六 晩年―天地万物すべてが教え
- 七 おわりに―信仰の柔らかな目

引用文献

一 はじめに―尊厳を求めて

歌人柳原白蓮―本名・燐子(あきこ)は一〇歳になるまでに、心ならずも四人の母を持った。生母奥津りよう、乳母増山くに、養母柳原初子、養母北小路久子です。数奇な運命の星のもとに生れ育ちました。

生母を知らず、里子に出され、小学校へ上がるころ、本邸へ帰ります。間もなく、父・前光が死去。家のために縁先である北小路子爵家へ養女にいかされたのです。

そこには養父が女中に産ませた長男・資武との強制的な結婚が待っていました。一五の夏、自分の体の秘密におのきながら、美しい青春であるはずの日々をもぎ取られ、一六歳で一子を出産します。自分と同じ年頃の少女たちの何と軽やかで明るいことか。自由になれない我が身を恨みました。幼き日の家に伝わる奇異な伝説や幽霊までも年とともに心のどこかで膨らんでくるのでした。

五年後、離縁を許されて柳原家に戻ります。蟄居させられますが、幸せを求めて果敢に自己と向き合い、内面を修養します。その時々境遇や空想の世界は後に歌人となるための温床でした。

二六歳で再婚を受け入れます。夫は石炭王の伊藤伝右衛門。華族の令嬢、天皇となるべき人といことになる若い妻を人形のように着飾らせて喜ぶのでした。燐子は筑豊・伊藤家での一〇年間、理解に苦しむ家族構成や居場所のない孤独に苛まれ熱心に読経しました。そばを流れる遠賀川に…と、時には自死の誘惑がよぎりました。幻滅と悔恨に明け暮れ、満たされない思いでいたその時、宮崎龍介に巡り逢います。

時代の革新に血を沸かす龍介に、燐子は後半生を託しました。三〇半ばで知った恋でした。姦通罪のあった当時の社会で「白蓮女史情人の許に走る」と揶揄された行為を伴ったにしろ、自分で選んだ相手を信じ

て、自己を見つめ直し、ようやく階級や富貴、さらに亡霊からも解放されました。

出奔後、宮崎家に落ち着くまでの二年間、誹謗中傷もあって、世間から身を隠しましたが、行き詰ってはいませんでした。燐子は当時勢いのあった神道の教えに傾倒します。そして大正一二(一九二三)年九月一日の「関東大震災」を機に宮崎家へ入ります。が、龍介は咯血し、枕もあがらぬ重病人でした。でも、几帳のかげでめそめそ泣いていたころの弱い燐子は葬られ、たくましく働く女に変身していきます。しばらくして病のいえた夫、二人の子どもと幸せな日々が訪れました。

太平洋戦争の終戦の四日前のことです。長男・香織が戦死しました。六〇歳で迎えた耐え難い悲しみに、燐子は「神も仏もありはしない」と絶望します。それでも白蓮は息子の死を靈魂の使者として高め、平和運動に時間を費やすようになりました。

ある点で貴族性と矛盾するかに思われるデモクラシー、世界平和、平等な人類愛など、進歩的な思想と調和・共存させながら、龍介というこよなき伴侶を得てスケールの大きい独自の世界を構築しました。白蓮ワールドです。

七〇歳過ぎた頃、高階龍仙(一八七六―一九六八)禅師と出会い、仏教に由来する言葉の数々に魅せられ、親しみを持って慕います。最晩年は目を患い、外に出歩くことも少なくなりました。ラジオを離れませんでした。龍介は手厚く燐子を看病しました。

八一歳の生涯は、特異な環境の中にあつたとしても、近代日本の女性史ともいえるほど、女性の尊厳を求め続け、愛と苦悩と波乱に満ちた日々でした。それどころさら徒党を組んで主義主張を振りかざしたわけではなく、身をもって、示したのです。

その、燐子の心のしなやかな強さは、どこからきた

のか。自分に忠実に真摯に生きることを選んだ燐子を
支えたものは、広い意味での宗教だったのではない
か。燐子の場合それは複数あり、宗派にこだわらない
ことが特徴です。神聖なもの（絶対的の神を含む）に対
して畏怖するばかりでなく、鋭い靈感を働かせながら
親和の情をもって受け入れたのではないか。そう仮定
して、これから、燐子＝白蓮の心の旅路をたどってみ
たいと思います。

二 幼少期—ミミズの餌で魚を

燐子は明治一八（1885）年一〇月二五日、柳原
前光伯爵の次女として生れました。当時、貴族階級の
習慣は「妻妾奴婢」（さいしよしうぬひ）李氏朝鮮に倣っ
た家族制度）、つまり主人を中心にその子供たち、妻
と家来と女中とが寄って一家を形づくっていました。
妾腹の子だからといって卑下することもなかったのだ
です。別宅に住まわせていた生母りようは柳橋の芸者で
した。正妻初子は「この子は私の次女にします」と生
後七日目に引き取り、公卿の慣習で、品川の漁師の家
に預けられました。乳母の「お国」（増山くに）は家
付き女房で、勝気な男勝りの大きな女性でした。燐子
は生れて間もなく死に掛けたほどの弱い子でしたが、
海辺で近所の子供たちと存分に遊び、ぬるぬるしたミ
ミズの餌で魚を釣り、珊瑚樹の紅い実でままごを食
し、自然の中でのびのびと愛情深く育てられました。

生母のことは北小路家から実家に戻った時、

柳原家に入入りしていた役者・団八から聞き
ました。「十六、七のときにこちらの殿様（前
光）に引かされ、麻布にお屋敷をいただいたて、
母親と生活していましたが二十歳そこそこで
なくなりまして。お墓は谷中にあります。燐
子さんを案内したいが柳原家にめいわくがか
かるといけないから」とその時は詳しいこと

は教えてくれませんでした。：宮崎家に落ち
着いてから谷中の妙圓寺を訪問、和尚さんに
会い、自分の名を告げてすべての事情を話し
ました。(1)生々流転



妙圓寺に祀られていた位牌 生母と燐子
左 容顔院妙良日光信女
右 妙花院心華白蓮大姉

筆者は平成二四年夏、妙圓寺を訪ねました。日蓮宗
のお寺で、裏手の墓地に「奥津良（りよう）の墓」（奥
津家）がありました。住職が亡くなり、寺を守る妹の
中川恭子さんが「住職は九条武子さんと白蓮さんの大
ファンでした。武子さんは、昭和三（1928）年二
月七日に四二歳で逝かれました。武子さんに作っても
らった『合掌の歌』を、昭和一〇年ごろ妙圓寺を訪ね
て来られた白蓮さんに筆で清書してもらいました。寺
の宝として大切にしています」と、幅一トもある額を
示されました。宗派で言えば、浄土真宗の九条武子、
真言宗の宮崎燐子、日蓮宗の妙圓寺住職となります
が、本堂に堂々と飾ってあり、全くこだわりがないよ
うでした。

ところで燐子が養女に入った北小路家での暮らし

はどのようなものだったのでしょうか。年取った養父母
（随光・久子）は燐子を可愛がり、あまり豊かではな
かったので親子三人で一つの居間で寝起きしました。
昔の御所の不思議な話—長い廊下をお局部屋に戻って
いると狐や狸が化けて大入道になり驚かされたこと、
和宮の御降嫁の話など、つい昨日のように聞かされま
した。この父から公卿のたしなみ、和歌、琴、茶道、
香道を習いました。養母・久子は讃岐の白鳥神社の神
主の娘。北小路家は公卿で一応神道でしたが、日ごろ
の生活に神道は役立ってはいませんでした。時代離れ
した源氏物語の世界でした。

平安の都は古い歴史をへて 傳説と不思議と
に織り込まれ 様々の人の心の棲むところ
あやしの婆が怖ろしい(2)「おかくれになっ
た二位様」



白蓮が愛子(一位の局)からもらった内掛け
＝東筑紫学園所有

無理強いされた結婚に続く出産、破婚を経て、麻布
の柳原家に戻りますが、待っていたのは母・初子の隠
居所での、三年に及ぶ幽閉同然の生活でした。ひそか
に姉信子が古典から新刊詩集『みだれ髪』、新刊の文
学書までを差し入れてくれました。まさに独学の道場
でした。「学校に行きたい」と思う燐子へ容赦なく縁
談が持ち込まれます。心ない結婚にはもう耐えられな
い、と品川の乳母の家へ逃げますが、見つけれられて連

れ戻されました。

三 女学校時代―キリストのむすめ

明治一七（1884）年一〇月二〇日、カナダ・メソジスト教会は東京・麻布東鳥居坂に東洋英和女学校を開校しました。兄嫁の配慮があつて、燐子は二三歳で編入します。八歳年下の同級生、村岡（旧姓・安中）花子と寄宿舎生活を送り、二人は「腹心の友」になります。聖書を学び、賛美歌を口ずさむキリスト教の学校は、すべてが新鮮で楽しいものでした。病めるもの、貧しきものへの隔たりのない奉仕を捧げ、燐子はまさに「キリストのむすめ」になったようでした。信仰というものがどういふものかも知りました。

キリストのむすめとよばれほこりもて学びの庭にありしうくとせ

一方、燐子は人間の力の及ばない、科学で説明できない大きな存在をいつも見詰めていました。小さい時に見聞きした伝説の人形「みどり丸」には特別の愛着を持っていました。

すべての人間は過去に根を持っている。佛
教でいう前世のをいうのではない…。親が子
に話したことを子がまた孫に伝える…。公の
歴史でなく我が家の口から耳へと次々に伝
わっていく…。私の実家柳原の家にもこうし
たものが幾つかあつた。中で最も有名なのが
人形みどり丸。作者もわからないが這う子の
姿をした人形である…。書いたものは何もし
ないので作者もわからない。(3)生々流転・人
形と霊



路蓼さんによって修復された「みどり丸」

伊藤伝右衛門に嫁す時、柳原家の由緒ある「みどり丸」を持っていくわけにはいかず、嫁入り道具として、新調したものを持参しました。出奔後、「みどり丸」は伊藤家から家財道具とともに、燐子の元に帰ってきました。今でも娘の路蓼さんは「母の思い出の人形を大切にすることが母への供養になる」と、傷んだ人形を修理してそばに置いています。

では、宗教的な側面から見た当時の柳原家の日々はどのようなものだったのでしょうか。燐子が『大法輪』に寄せた「釈迦・キリストは生きている」の中に興味深い一節があります。

柳原家の菩提寺は目黒の祐天寺浄土宗。
祖先の霊を祀って祥月命日にはお経をあげて
もらいますが、信仰するという訳ではなかつ
たのです。公卿であるから、むしろ神道のほ
うが強かったのです。実家では宗教的という
か、呪術とか、崇りとか、神様、仏様を大切
にしてお経をあげないといけないといわれて
育ちました。日蓮宗でよく言う先祖の崇りと
か恨みとか憎しみとかが何百年たつても残つ
ていてそれをきれいにするためにはお経を読
まなければと知らされました。それで観音普
門品などを一生懸命読みました。このとき佛

教に法華経があることを知ります。(4)「釈
迦・キリストは生きている」

燐子は明治四三年（1910）に東和英和学校を卒業します。入学前、「女というものはつまらないものです。どうせ売り物だから買うほうに不足があれば知らず売るほうには不足を言うものではない…」（『近代の女性文学者たち』）と言っていた女性は、生い立ちの中で身に着けた公卿の伝統や慣習、宗教に、新しく社会奉仕や平等、自立の観念を身にまとい、屋敷へ戻りました。

四 筑豊時代―読経の日々

女学校を卒業して兄義光の世話になり、佐佐木信綱に歌を見てもらっていた時のことです。兄嫁が燐子に話を持ってきました。自叙伝『荊棘の實』を参考にいつまんで書けば「相手は九州の炭鉱王で伊藤伝右衛門という人。腕一本で炭鉱王といわれるほどの財を作り、自分に学問はないが教育には理解があり女学校をつくったのよ」、「ただ年齢が隔たっているけれどなくなった先妻に子どもはないし、かえってあなたを愛してくれる、と思うの」といった説明だったようです。燐子の気を引く話しぶりでした。

その頃の私共が宗教教育をたぶんに受けている際だけに、人の為とか社会の為とかいふものには直ちによい感じをもつて私の胸にひびくのです。先方が一つの女学校を建てていることや貧しい人の為に幾人かの学生を世話しているといふ話もどんなに私達をして希望を持たせられたことでせう、これ等の仕事の幾分なりとも自らすることの出来る奉仕の生涯のどんなに清く美しく神の前にも清められた心の軽さとよるこびとが、その他の多くの不満や不安を考えて見るとまもなく打ち

消してしまふほどのなりました。(5)「自叙伝」

当時「恋がなくとも愛があれば」と思ったのは燐子の大きなあやまちだったのでしょうか。

「母から直接に聞いたことはありませんが、当時格式にこだわった階級、華族の娘である母にはどうしても切り抜けれない事情があったにしても、大きな覚悟のもとに、結婚に踏み切り、九州へ参ったのだと思います」と娘の露蓼さんは語ります。学校で宗教的な奉仕の精神を見つけていた燐子は貧しい人、病める人、すべての弱き人たちの味方にならなければ、とせつに望んでいたのです。しかし再婚先で燐子の望みはかなえられませんでした。家族構成も複雑で、一家の主婦としての立場も取り上げられ、ただ、人形のように着飾って座っていればいいという日々は耐えがたかったのです。甘い人道主義者であり、理想主義者だったと振り返って次のように書いています。

ひとりでに涙があふれてきます。私の生れた家に、むかしむかし何かの祟りがあつて、たとえば先祖が美しい侍女をいじめ殺したといふやうな恨みが子孫の私にとりついて、私は本当に幼い時から不幸せでした。それがとうとうこんな遠い国に、昔天神様の流されたと同じ国に、こんなにも淋しい日を送るべく余儀なくされたのだ。だから私は、私の知らない恨みの亡霊を供養する為に、尼様みたいにお経をあげなければならぬ。――亡霊が堪能すればもう私を泣かせるようなことはしなくなるであらう――自らの運命をあきらめて私は静かに暇さえあれば読経した一年久しくなつて観音經の普門品(ふもんほん)が、ほとんど文字の上を眼が歩いていなくとも、私の唇からはよどみもなく、お経の文句が流れ出づるやうにまでなりましたが。(6)「愛

は甦る」

辛い日々を乗り越えたい燐子は必死でした。

こんな時こそ信仰で救われなければならぬい、お経を読んだら必ず救われるとかねがね聞いていたので熱心に読経をしましたが救われないままに十年の年月が過ぎていきました。こんなままでやつていっているのに救われないなら仏もお経も何もないではないか、南無妙法蓮華經なんか大嫌い、お経をほっぽり出してしまいました。(7)前述「釈迦・キリストは生きている」

飯塚市にある安楽寺は伊藤家の菩提寺です。

ここに白蓮の本名で「燐子図書」の印が押された經典が奉納されています。經典が各五冊入った経箱が七十、その冊数は三百五十になります。坊守(住職の妻)高城尚子さん(平成二五年没)は先代から白蓮のことを聞いて、露蓼さんに手紙を出しました。露蓼さんは「母は宮崎の家では伊藤家時代をほとんど話してませんでした」、「經典のことも初めて聞いて、あらためて母の淋しさを知った」などと返信があつたそうです。



安楽寺に収められた經本
350冊すべてに燐子の印鑑がある

大正一〇(1921)年一〇月二二日、「同棲十年の夫を捨てて白蓮女史情人の許に走る」と、朝日新聞が報道。出奔直後から、善悪の批判などは連日、新

聞、雑誌をにぎわしました。以来、離れ離れに二年に及ぶ謹慎生活が続きました。京都の尼寺で野々宮瑞光という法名で呼ばれるなど、あちこちと居場所を変えながら、世間から身を隠しました。兄嫁の実家の方から紹介されて、大本教の教理を学びました。その頃は神道が大変盛んで、方々から信者が大勢集まってきました。「南無妙法蓮華經なんか大嫌い」とお経を放り出していた燐子は、純然たる高天原の神道の教えを熱心に学んだのです。

お線香を上げて、チーンと力ネを打つてしんとしてそれがいいのでしようが淋しかった、ことに身の上が淋しい時には。これが神道で祝詞を上げて拍手を打っていると、気持ち明るくなってすっかり性格も、人間も変わりました。祝詞をあげて拍手を打つと気持ち明るくなり、天地の中に自分が溶け込んだように思われました。(7)と同じ

燐子は性格が変わったかのように強くなれるのでした。

五 宮崎燐子―わが子は若くして：
大正一一(1922)年五月一四日、燐子は男子を出産しました。子どもをめぐる裁判などがあり、親子が一緒に暮らせるようになったのは翌年、大正一二年九月の関東大震災の後でした。燐子三八歳、龍介三三歳、香織一歳。

二年後に長女・露蓼が生まれます。昭和三(1928)年ごろ四歳の露蓼さんと深川のお不動さんに参詣しました。露蓼さんは「お不動さんの頭が大きくて怖いな」と思ったのですが、大きくなって行くと普通に見えた」と振り返ります。燐子はそれからずっと毎月一日、二〇年以上、お参りを欠かさなかったそうです。燐子の主宰した短歌会「ことたま」の会員、内山真理子さ

んは、一日が歌の稽古の日と重なった時、事情を知らずに出かけたことがありました。当然「お休み」でした。すると「燐子」の名前で「せつかく見えたのに留守をしてごめんなさいね」と詫びの手紙が届きました。忙しい日をやり繰りしながら、不動尊信仰は長い間続きました。

その頃、昔、お世話になったという尼寺にも行ききました。

昭和三（1928）年五月半ば、四歳になるふき子をつれ久しぶりに京都に行く、紫野の尼寺に宿る

尼僧らの洗濯物のしろきぬ裏庭に見えてまひるしげき

ひとあさは我もまぢりて本堂のみあかしのまへに手を合わせけり

雨戸さ、ぬ寺のならばしの気楽さよ障子の外は月あかりなり（8）「尼寺にて」



家族とともに
左から 燐子 露琴 龍介 香織
宮崎家提供

昭和六（1931）年、高田町の上り屋敷にある宮崎邸に『新潮』の記者、榎崎勲が歌人白蓮＝燐子の取材で訪ねました。龍介は健康を取り戻し、夫婦で中国を訪問した年でした。中国服で現れた燐子はインタビューに生き生きと答えました。

二人の子ども、香織九歳、露琴六歳に対する教育方

針はとの質問に、

香織はよほどの異り者です。とても情け深い、そして無欲なんです。肉や魚はあまり好きではなくて、この子宗教家にもなるんだらうかと、親たちは吐息することもある。…母親の願いはあんまりひどく偉い人にはなつて欲しくない、国家を扱うとか、世界を動かすという人は、他人にあつてこそ、ありがたくもありましょう。わが子がそうした人であつたなら、母としてはどんなに心配だか知れませんが。聖母マリアなんかは可愛そうだと思います。如何に人類の幸福のためだつて、可愛い我が子が十字架につけられることを考えたら、私なんかは大工のせがれはそれらしく、たたき大工で一生平穩無事に暮らしてくれたい。たほうがどんなにか嬉しいか知れませんか」

（9）柳原燐子夫人訪問

昭和五、六年ごろの燐子は歌人として、物書きとして多忙であるばかりか、身内ならぬ家族と、それら八人または十人を世話するという慌ただしい毎日を送っていました。身に覚えのない恨みの亡霊も去り、「仏も何もあつたものか」と全く打ち捨ててしまっていた経文をこの頃になってまた誦し始めます。燐子は平穩な日々を満喫しておりました。

しかし、家庭的にも経済的にも充実した日々は敗戦の直前に打ち砕かれます。学業半ばで学徒兵として応召した香織が大戦終結間ぎわの昭和二〇年八月一日に戦死したのです。「辛い試練にもあの子故に乗り越えてきた」かけがえのない我が子でした。

夜をこめて板戸をたたくは風ばかりおどろかしてよ吾子のかへると

正直なところ、神を恨みました。それで神

棚にある様々なお札というお札はかまどの下に焼き捨ててしまいました。日中は人が来たり、忙しく泣く暇もないのですが、夜床の中で目が覚めたらもうどうにもならなくなる、ついに死後の生命といったような霊学研究の本に取り付きました。見えざる神霊を信じ、正しい霊界も知りたいたいと思いました。（10）「追憶」

「わが子は若くして戦死し、もう再び家には帰ってこない。戦争は人類を最大の不幸に導く唯一の現実です」と燐子はNHKに出演し、戦争で子どもを失った親の悲しみと、平和を願う気持ちを訴えました。毎月一日の香織の命日を母親たちと集う日にし、二月五日、「悲母の会」結成。「国際悲母の会」から「世界連邦建設同盟」へとつながりました。

昭和二八年七月一日に発行された国際悲母の会の機関誌『悲母』に主旨がしたためられています。

母の子に対するひたむきな愛情は道徳の根源である。わが子だけの偏愛、溺愛は世に限りなくあるが、そこに慈しみ、悲しみの愛、つまり大慈大悲の神仏の愛にまで高めていく努力が必要となる、これは理性、知性によって、子への愛情を正常なものへもつてゆき、努力によつて高い強い純粋なものにしてゆかねばならない。今回の敗戦によつて神仏の加護を絶対と思っていた日本人の魂のよりどころは迷わざるを得なかつた。宗教でもないので教義も経典もない、道を説くこともない、同じ悲しみを悲しみ、喜びを分かち合い、各々その自然の生活のままの状態で真の融和をもつてゆくのがこの「悲母の会」の主旨といえよう。（11）「ほのほのとした希望」

燐子は全国を精力的に回りました。そして悲しみを

分かち合う中で「神を恨むのではなかった。霊魂の世界に引き上げられた香織はあの日、あの時、あんならねばならぬ人だった。こんどは神界に応召されて香織は、大なる平和日本建設のために、今は忙しく働いているでしょう」と気持ちを感じることができました。

六 晩年―天地万物すべてが教え

何かを信じようとする心、魂を常にかけていた燦子は、緑内障で次第に視力を失い外出も困難になっていきますが、気丈に家の中で過ごします。ラジオを聴いたり訪問客に会ったり前向きでした。

私は毎日五時に起きる、夕方は七時に寝る。先ず起きて床の上で軽い体操をして寝まきを着がえる。それから神に祝詞を三種と見える。私は神を心のよりどころにしている。キリスト教には聖書があり仏教にはお経があるが、神道にはそつしたものは何もない、それだけに教えは大きいものだと思う。天地万物すべてが教えであって最も深いものである。それから日ごろ自分を大切にしてくれる人々を頭に浮かべそれらの人々に対し「有難う」と感謝の言葉を百遍云う。その次に自分が知らずして犯せる罪に対し「ごめんなさい」とこれも百遍云う。そして朝食をすませ神棚にお明かりをあげておがむ、これだけのことを毎朝繰り返す。(12)「百年前にかへって来た日」

高階瓏仙禅師との出会いは、仏教を再び見直すことにつながりました。

燦子は歌を詠むときに昔から十分理解しないまま仏教の難しい言葉を使いましたが、瓏仙禅師から「私がこの歌に点数をつければ百点は上げてもいいよ」と褒

められました。

松の風般若波羅蜜と聞こゆなり法界一字の中に在る我

そして般若波羅蜜や法界一字の意味を事細かに教えてもらいました。「仏教の教えはなかなか深いものだと感じて嬉しくなった」(「釈迦・キリストは生きている」と述べています。

なお、「広辞苑」によると、「般若波羅蜜」はさとり
の知恵、「法界一字」は縁故のないこと、とあります。

※高階瓏仙 福岡県嘉穂郡上臼井村(現在の嘉麻市)生。
昭和55年、セイロンでの第一回世界仏教徒会議の日本代表。



前列左 宮崎燦子 中央 高階瓏仙

瓏仙禅師に帰依していた日吉貞さんは、「世界連邦婦人の会」理事として宮崎家へも出入りし、白蓮と親しくされていました。燦子が寝たきりになってからも足しげく見舞い、看護も手伝えました。その日吉さんが次のように書き残しています。

宮崎白蓮女史が逝去された時のことであります。夫君宮崎龍介様より個人が生前禅師様にお葬式をお願いできないだろうかとのご相談で

した。故人在世中には禅師様と親しくお話し合いをなされたこともあり、またある時には故人はお茶席を設けて、禅師様と明治神宮の甘露寺宮司様をお招きいたし、私も同席させていただき寄せ書きなども遊ばされ、一日楽しく過ごされたこともありました。禅師様に願えば故人も定めし喜ばれるだろうと早速連絡をとりました。禅師様をご導師にお願いすると、式場も大本山永平寺の東京別院がよろしいかと考え、別院の丹羽監院様により万事都合に運びました。戒名のことを宮崎家よりご希望もあつて「妙光院心華白蓮大姉」と命名されました。(13)「禅師と白蓮女史のことども」

短歌会「ことたま」会員・植田安也子さんは病床の燦子がほっそりと布団に横たわる姿が「あまりにきれいなので、鶴の巣ごもりみたいだった」と振り返ります。昭和四二(1967)年二月二三日二時――。「二」ばかりを選んで、暁子は八一歳の生涯を閉じました。

七 おわりに―信仰の柔らかい目

燦子の生きた時代の大半は、明治、大正、昭和の女性を呪縛していた強力な家父長制をはじめ姦通罪、離婚女性への偏見など一人では抗いようのない男性中心の社会でした。公卿出身、絶世の美人、強い自我・才能等に秀でていたという特別な存在であったにせよ、女性の抱えた普遍的な問題を乗り越えて生きてゆかねばなりません。

その節目には「霊魂」を彷徨させ、日蓮・法華経を誦し、またある時はキリストの娘になり、神道に傾頭し、禅宗に帰依する――。特定の神仏に凝り固まるような狭義のものでない柔軟さに、あらためて目を見張

らせられます。

筆者は平成二〇年春、白蓮が眠る神奈川県相模湖町の石老山「顕鏡寺」を訪ねました。最愛の香織に先立たれるという悲しみに耐えなければならなかった宮崎家は郷里・荒尾市に大きい墓地があるのに、香織の安住の地をと、新たに墓地を探し、宮崎家と親しい中国の友人たちも一緒になって、手を尽くして顕鏡寺に辿りつきました。

真言宗のその寺は平安朝の初期、高家の宮人が恋の隠れ家であったものを、後に発心して寺を建立した、という謂れがあると、和尚から聞きました。宮崎家の「みたま」を包み込む場所にふさわしい、と納得しました。深い緑の山肌に包まれた墓地には香織、燐子、龍介、平成一五年に亡くなった落葉さんの夫・智雄さんが眠っていました。

「私は、過去にずいぶん悩み、苦しみ、泣きもしましたが、今はもう全くそういうこともなくなって、おだやかに生活ができるのも信仰のおかげかもしれせん……。信仰の柔らかい目が人間には必要であるとかたく信じております」。この墓の前に立った時、筆者の脳裏をよぎったのは燐子が「釈迦・キリストは生きている」にしたためたこの言葉でした。いままも筆者の心に深く刻み込まれています。

引用文献

- 1) 柳原白蓮著 松永伍一編「生々流転」『火の国の恋』昭和34年11月30日発行 株式会社タイムス社
- 2) 伊藤白蓮「おかくれになった二位様」『几帳のかけ』大正8年5月1日発行 玄文社
- 3) 「生々流転・人形と霊」『火の国の恋』
- 4) 宮崎白蓮（歌人）「釈迦・キリストは生きている」『大法輪』昭和38年1月号 大法輪閣発行
- 5) 白蓮女史「自叙伝」『新小説』1922年1月号

春陽堂

- 6) 柳原燐子「愛は甦る『恨みの亡霊への感謝』」『婦人公論』1929年5月号
- 7) 文献4「釈迦・キリストは生きている」
- 8) 柳原燐子「尼寺にて」『女人芸術』創刊号 昭和3年7月1日発行
- 9) 榑崎勤「柳原燐子夫人訪問」『新潮』昭和6年9月号
- 10) 白蓮「追憶」『ことたま』終戦復刊第1号 昭和21年10月1日 ことたま社
- 11) 国際悲母の会「ほのほのとした希望」機関紙『悲母』昭和28年7月11日発行
- 12) 柳原白蓮・口述筆記「百年前にかえつて来た日」『ことたま』昭和36年12月20日 ことたま社
- 13) 日吉貞「禅師と白蓮女史のことども」『高階瓏仙禅師伝』昭和49年1月19日発行 編者 原田亮裕 発行者 可睡斎